

「第 27 回国際昆虫学会議開会式」秋篠宮皇嗣殿下お言葉（和文仮訳）

2024 年 8 月 25 日

第 27 回国際昆虫学会議(ICE2024)が「知の統合による新たな発見」をメインテーマとして、日本の古都である、ここ京都で開催され、国内外の多くの皆様とともに開会式に出席できましたことを大変うれしく思います。

国際昆虫学会議は、1910 年にブリュッセルで第 1 回の会議が開催されて以来、100 年以上にわたり昆虫とそれ以外の一部の節足動物分野における基礎研究と応用研究、学術的な交流などを国際的に推進してこられました。日本での開催は、1980 年の第 16 回会議以来で 2 回目になります。これまでの長きにわたり、この分野の発展を支えてこられた方々ならびに本会議の開催に尽力された組織委員会に、深く敬意を表します。

昆虫は地球上に生息するすべての動物種の 4 分の 3 を占め、様々な環境に広く適応した、きわめて多様化した生物群です。また、昆虫は人間にとって身近であるとともに、環境指標になる生き物でもあります。そして、私たちの生活や経済活動とも深い関わりがあります。

また、昆虫学は、生物学や、農作物を害虫から防除する農学の一分野にとどまるものではありません。各地域における昆虫の民俗知や生態知、民俗分類、昆虫食などをおし、人間との関わりを研究する民族昆虫学、そして、ポップカルチャーも含め、昆虫の文化表象から人の認識を調べる文化昆虫学など、きわめて間口が広い学問です。

私が関心を持っている家畜化の分野においても昆虫は関係してきます。例えばカイコがどのようにして人と関わるようになり、家畜となり、その後にさまざまな品種が作られてきたのか、また養蜂の主たる対象であるセイヨウミツバチや農作物の授粉用に商品化された数種のマルハナバチが、現在どのような家畜化段階にあるのかは実に興味深い事柄です。

このように、きわめて学際的な分野である昆虫学の国際会議に、国内外から約 4,000 人の研究者や子どもたちを含む市民が集い、議論を深めることは誠に意義深いものと申せましょう。

おわりに、自然科学から人文・社会科学、そして広く市民にいたる多面的な交流が、「知の統合」の実現の一助となり、ひいては種や環境の保全、そして昆虫学の発展と深化に貢献することを期待いたします。そして、この会議と皆様のご滞在が実り多く、有意義で心優しいものとなりますことを祈念し、開会式に寄せる言葉といたします。